

1. 重点目標		令和元（2019）年度	令和2（2020）年度	令和3（2021）年度	令和4（2022）年度	令和5（2023）年度
重点目標	実現方策	当初年次計画1年目	当初年次計画2年目	当初年次計画3年目	当初年次計画4年目	当初年次計画5年目
		計画 実績	計画 実績	計画 実績	計画 実績	計画 実績
① 検索が楽しめるデータベースの構築と公開方法の改善	現データベースを基盤に、新たにテーマ型データベースを構築し、知的好奇心を喚起させるアクセスしやすい収蔵資料情報整備し、試行する。	既存公開データベースの運用上の課題や利用状況を把握し、テーマ型データベースの設計を検討する。	データベースのテーマを設定する。	コンテンツを整備する。	テーマ型データベースの一般公開の試行開始	試行データベースの運用結果を取りまとめ、課題やニーズを把握し、本格運用を目指すか判断する。
		既存公開データベースの運用上の課題や利用状況を把握し、テーマ型データベースの設計を検討する。	データベースのテーマを設定する。	テーマ型データベースのコンテンツを整備する。	テーマ型データベースの一般公開の試行開始	試行開始したテーマ型データベースの周知に努め、利用状況の把握と本格的運用の方向性について検討する。
		テーマ型データベースを導入している他館の情報を収集した。	各分野に案を募り、6分野20テーマを設定した。またテーマ型データベースは公開資料であることが前提となるため、公開に向けた作業を積極的に行うように各分野へ促した。 <b>計画どおり実施</b>	各分野で設定したテーマに関する資料情報・写真登録及び資料解説原稿を準備し、次年度の試行に向けてコンテンツを整備した。設定テーマは、「会津藩校日新館の教育」・「会津大塚山古墳」・「福島県民の関わった南極観測」・「会津の絵画」・「幻の土人形～根子町人形」・「東日本大震災の避難所資料」の6件である。 <b>計画どおり実施</b>	一般公開の試行開始に向けて、収蔵資料データベース（DB）の資料項目に「震災遺産類」を追加し、テーマのひとつである震災遺産を資料登録できるようにした。また、テーマ型DBをwebサイトで表示させるための準備としてデータベースの設定変更を行った。 3月に「学芸員のおすすめ資料」として5テーマの資料紹介ページを公開し一般公開の試行を開始した。 <b>計画どおり実施</b>	本県を代表する資料である大塚山古墳と会津藩校日新館の2テーマはアクセス数が比較的多かったものの、周知不足もありアクセス数は伸び悩んだ。現状のコンテンツの少なさ（写真付きに限ると4分野28件）やテーマが限定的であることなど、改善すべき点が多い。本格的運用には、第一にコンテンツ数の増加のほか、広く利用者に響くテーマ設定や、写真掲載を必須とするなど、より魅力あるコンテンツ提供が課題である。 <b>一部計画どおり実施</b>
② 図書利用環境の整備	図書配架スペースを確保し、図書利用環境を整備する。 図書データベースを一般公開し、運用ルールを策定した上で一般来館者の図書利用を試行する。	図書室における図書配架の現状把握と新たな計画を策定する。	図書室2層の配架環境を整備する。	図書室2層の図書配架の運用開始を開始する。一般来館者の図書利用要項の策定をめざす。	博物館の図書データベースを外部に公開する。閉架図書的一般（館内）利用の試行開始する。	閉架図書利用サービスの運用結果を取りまとめ、課題やニーズを把握し、本格運用の方向性について検討する。
		図書室における図書配架の現状把握と新たな計画を策定する。	図書室2層の配架環境を整備する。	図書室2層の利用を開始する。1層図書の再配置を完了する。一般来館者の図書利用要項を策定するために、図書室の現状と問題点を詳細に把握する。	博物館の図書データベースを外部に公開する。一般来館者の図書利用要項を策定し、閉架図書的一般利用に必要なシステム（物品、人員、手順など）を検討する。	閉架図書的一般利用に関する利用者のマニュアルおよび担当者の対応マニュアルを整備し、利用申込の窓口を開設する。図書的一般利用を試行的に開始する。
		図書室2Fにおける物品配架の現状をほぼ把握し、2Fの整備利用計画について構想した。	図書室2層への図書の移動・配架計画を立案するとともに、2層で保管していた物品類を他所へ移動した。1層の図書を2層へ配架し直す作業を計画通り完了した。更に1層の図書の再配置にも一部着手した。 <b>計画どおり実施</b>	図書室2層の利用を開始し、1層図書の再配置を完了した。図書室の現状と問題点の把握については、図書室設置位置が管理棟最奥部であることによる一般来館者の入室管理性や司書の業務量や人員体制の面から一般への図書閲覧サービスを行う上での課題について共有した。 <b>計画どおり実施</b>	博物館図書データベースの外部公開対象とする図書を選定し、登録済み書誌データの書式統一作業を実施した。その後、当館ホームページより、図書データベースの外部公開を試行的に開始した。閉架図書的一般来館者への供用について、これに必要な図書利用要項の草案を作成し、学芸員会議に諮って内容を検討した。 <b>計画どおり実施</b>	当館図書室の特徴的な蔵書を主な対象として、博物館図書データベースの外部公開を継続。加えて受入れマニュアルや申込用メール等を整備し、一般来館者への閲覧供用を試行的に開始した。さらには将来的なコピーサービスの開始や県立図書館の県内図書館横断検索への参加に向けた諸準備を進めた。 <b>計画どおり実施</b>
③ 資料の安全な保存	適切な情報取得と情報共有をもとに、適正な保存環境を維持する体制を確立する。 保存環境モニタリングの情報取得方法・内部共有システムをバージョンアップするとともに適正に運用する。	情報共有の場となる会議を設けて、課題を抽出し、リスクアセスメント計画を作成する。	通常モニタリングや環境調査結果を共有する館内の枠組みを整備し、空気環境のリスクマネジメントを構築する。	リスクアセスメント計画を運用する。館独自の施設概要調書を作成する。	リスクアセスメント計画を見直し、必要に応じて修正する。資料の貸借において施設概要調書を確実に添付する。	リスクアセスメント計画を運用する。資料の貸借において施設概要調書を確実に添付する。
		情報共有の場となる会議を設けて、課題を抽出し、リスクアセスメント計画を作成する。	通常モニタリングや環境調査結果を共有する館内の枠組みを整備し、空気環境のリスクマネジメントを構築する。	環境モニタリングや環境調査結果から現状の環境リスクを検討・共有する機会を定期的に設け、課題解決の方策を検討し、実践する。	環境モニタリングや環境調査結果から現状の環境リスクを検討・共有し、課題解決のための方策を実践していく。	環境モニタリングや環境調査の結果を活用し、データに基づいて保存環境の調整を計画的に実施していく。
		空気環境調査の結果について館内で共有し、適切な収蔵庫環境を構築するために空調機器・設備の現状を把握し、機器更新及び改修の方向性について検討した。	モニタリングのネットワーク方式化について、機器の仕様を確認しながら県担当課と協議し方向性を決定した。また空調機器の課題について県担当部署等と協議した。環境調査はコロナ禍であることを踏まえ手法や期間を検討し実施した。モニタリングや調査結果を共有する枠組みの整備について内部会議で説明し、組織の在り方や運用方針について検討を加えたが、リスクマネジメントの構築までには至らなかった。 <b>一部計画どおり実施</b>	温湿度常時モニタリングや定期環境調査結果を各分野の担当学芸員と共有し、収蔵庫や展示室等の環境レベルについての現状と課題を検討した。対策の一環として計画的な館内清掃と実施効果を図る追加のモニタリング調査を実施した。館内環境の改善が見られ、館内環境保全のPCDAサイクル策定への一歩となった。 <b>計画どおり実施</b>	環境モニタリングや環境調査結果を集計し、館内環境動向について資料を管理する各分野と共有した。集計結果をもとに収蔵庫の環境整備や展示室の温湿度調整を行うことで、館内環境の維持・改善をはかった。 <b>計画どおり実施</b>	環境モニタリングや環境調査結果を集計し、館内環境動向について資料を管理する各分野と共有した。これまで蓄積されたデータをもとに展示環境・保存環境の変化を分析し、異常の早期発見、突発的なトラブルへの早期対応につなげることができた。 <b>計画どおり実施</b>
④ 多様な連携による新たな研究活動	地域の歴史・文化や自然遺産に関する学術研究を推進するため、多角的な視点と最新の研究手法が共有される新しい研究プロジェクトを自治体や大学・研究機関などの外部組織と立ち上げる。 その中で主体的かつ連携を強化する役割を果たして効果的な研究活動を実践する。 特に新たに博物館資料に位置付けられた震災遺産の調査研究を推進し、博物館活動における災害史領域の普遍化を目指す。	共同研究組織を立ち上げたり、特定の研究課題組織に参画するなどして、学芸員の専門性を生かした役割を果たし、研究成果を公表する。	共同研究組織を立ち上げたり、特定の研究課題組織に参画するなどして、学芸員の専門性を生かした役割を果たし、研究成果を公表する。	共同研究組織を立ち上げたり、特定の研究課題組織に参画するなどして、学芸員の専門性を生かした役割を果たし、研究成果を公表する。	共同研究組織を立ち上げたり、特定の研究課題組織に参画するなどして、学芸員の専門性を生かした役割を果たし、研究成果を公表する。	共同研究組織を立ち上げたり、特定の研究課題組織に参画するなどして、学芸員の専門性を生かした役割を果たし、研究成果を公表する。
		共同研究組織を立ち上げたり、特定の研究課題組織に参画するなどして、学芸員の専門性を生かした役割を果たし、研究成果を公表する。	共同研究組織を立ち上げたり、特定の研究課題組織に参画するなどして、学芸員の専門性を生かした役割を果たし、研究成果を公表する。	共同研究組織を立ち上げたり、特定の研究課題組織に参画するなどして、学芸員の専門性を生かした役割を果たし、研究成果を公表する。	共同研究組織を立ち上げたり、特定の研究課題組織に参画するなどして、学芸員の専門性を生かした役割を果たし、研究成果を公表する。	共同研究組織を立ち上げたり、特定の研究課題組織に参画するなどして、学芸員の専門性を生かした役割を果たし、研究成果を公表する。
		民俗分野では磐梯町と取り交わした協約書をもとに共同での調査研究事業を進めた。 学芸員個人としても国立歴史民俗博物館の共同研究や明治大学の科研費による研究に参画し、連携した研究を行った。震災遺産に関しては、京都で行われたICOM（国際博物館会議）や専門誌で、これまでの成果を公表した。 <b>計画どおり実施</b>	国立歴史民俗博物館の共同研究や明治大学科研費による課題研究、会津大学の研究プロジェクト等にそれぞれ学芸員が参画して連携した研究活動を実施し成果を公表した。 <b>計画どおり実施</b>	国立歴史民俗博物館（民俗分野）、群馬県立自然史博物館、北海道大学総合博物館、カールトン大学（自然分野）、熊本大学（災害分野）、明治大学（考古分野）など幅広く各分野で共同研究が行われた。また学鳳高校、会津大学など地元機関との共同研究も立ち上げられた。 <b>計画どおり実施</b>	国立歴史民俗博物館（民俗分野）、北海道大学総合博物館、モンゴル国立古生物学研究所（自然分野）、国立環境研究所・筑波大学（災害分野）、明治大学（考古分野）、帝塚山大学（歴史分野）など幅広い分野で、国内外の多様な機関と共同研究ネットワークを拡げた。また会津大学や学鳳高校など地元機関との共同研究も順調に継続している。 <b>計画どおり実施</b>	北海道大学総合博物館、モンゴル国立古生物学研究所（自然分野）、筑波大学（災害分野）、明治大学・福島大学（考古分野）、帝塚山大学・淑徳大学（歴史分野）、南国Rスタジオ（災害分野）など幅広い分野で、国内外の多様な機関と共同研究ネットワークを拡げた。また会津大学や県立会津学鳳高校など地元機関との共同研究も順調に継続している。 <b>計画どおり実施</b>

⑤ 何度でも足を運びたい展示づくり	常設展の展示替えや魅力ある企画展の開催により、常に新しい発見のある展示室を構築し、リピーターの増加を目指す。	来館者を常設展示室へ誘導するため、企画展や行事と連動したポイント展・テーマ展を試行する。	前年度に引き続き企画展や行事と連動したポイント展・テーマ展を実施し、展示室でのPRも工夫する。企画展について多様な利用者層に興味を持っていただけるように展示手法を工夫する。	常設展・部門展示室の整備、展示替えにより常設展示の新たな魅力を創出する。	子供たちにも親しみやすい展示の実現のため、常設展・企画展での解説や企画の充実化を図る。	ポイント展、テーマ展、特集展に変わる新たな展示の枠組みを構築し、常に新しく魅力ある常設展示を目指す。
		来館者を常設展示室へ誘導するため、企画展や行事と連動したポイント展・テーマ展を試行する。	前年度に引き続き企画展や行事と連動したポイント展・テーマ展を実施し、展示室でのPRも工夫する。企画展について多様な利用者層に興味を持っていただけるように展示手法を工夫する。	国内在住の外国語ユーザーやインバウンドの展示理解を促進するため多言語化を充実させる。	常設展の一部（部門展示室・レストコーナー等）について、情報通信技術を活用し、来館者の世代を問わず映像や音声で体感できる展示手法を導入する。	「三の丸からプロジェクト」事業の中で、インバウンドの来館増を想定して、携帯端末等を用いた多言語化を含む展示解説を実施する
		企画展や行事等と連動した常設展示室のポイント展・テーマ展を計9回実施した。特に特集展「震災遺産を考えるーそれぞれの9年ー」と連動したテーマ展「山口弥一郎のみた東北」では、アンケートでご好評をいただいた。	常設展については、企画展や行事と連動したポイント展・テーマ展を計10回実施した（例：企画展「ふくしまの旅」と連動したテーマ展「けんぱくの宝2020 旅によせて」など）。企画展については、親子連れやSNS利用者向けに撮影スポットを設置したり、新型コロナウイルス感染症対策をした展示室づくりを心がけるなど、多様な利用者層に興味を持っていただけるように工夫した。 <b>計画どおり実施</b>	常設展示室（大テーマ・中テーマ）や無料空間について、英語・中国語（簡体字・繁体字）の3か国語によるデジタルサイネージ等での多言語表記を整備し、展示の充実を図った。 <b>計画どおり実施</b>	部門展示室「民俗」について、これまでの展示コンセプトを継承しつつ、テーマを文化観光に関連付けた「雪国のくらしものづくり文化」へ拡充するため情報通信技術を活用した企画・設計を進め、実物大模型や映像・音声で雪国を体感できる展示を新設した。 解説員動画を作成し、年代を問わず誰でも資料に親しみを持てるようレストコーナーに設置した。また解説員がワークシートやメッセージボードを子ども向けとして作成し「なんだべや」（旧体験学習室）脇に設置した。 <b>計画どおり実施</b>	三の丸アベニューの整備を進めプロジェクションマッピングを活用した会津スタジアムの整備を行った。情報端末を用いた展示解説の実装に向けて、資料のキャプションについて多言語化を進めた。携帯端末を利用したVRシステムへの実装は次年度取り組むための準備を進めたが、総合展示室が閉室となったため未実施となった。会津若松市国際交流協会、会津大学の留学生と、それぞれ展示に関する意見交換会を実施し、デジタルサイネージの表示速度や内容について理解を深め検討を行った。 <b>一部計画どおり実施</b>
⑥ 博物館の魅力が詰まった新しいスタイルの講座の開催	展示と有機的にリンクしたり、テーマ性をもった多様な魅力ある講座を開発・実施する。	各分野、企画展担当者から挙げられた講座等について、ある程度の統一性や連続性が感じられるよう適正に日程を調整する。	常設展・ポイント展などと連動した講座の開催を各分野に促し、展示を補完するような講座を企画する。	常設展・ポイント展などと連動した講座の開催を各分野に促し、展示を補完するような講座を企画する。	展示に基づいたテーマを設定し、各分野の枠を越えて連続性のある講座を開催する。	展示に基づいたテーマを設定し、各分野の枠を越えて連続性のある講座を開催する。
		各分野、企画展担当者から挙げられた講座等について、ある程度の統一性や連続性が感じられるよう適正に日程を調整する。	新規イベントのコンセプトを明確にして発信力を上げる。次年度について、展示と連動したイベントや分野横断型の総合講座を企画・調整する。	常設展・ポイント展などと連動した講座の開催を各分野に促し、展示を補完するような講座を企画する。	WITHコロナにおける開催・発信方法で常設展・ポイント展などと連動した講座（ミニ解説会など）を実施する。「三の丸からプロジェクト」に関するテーマなどで分野の枠を超えた講座を検討し、令和5年度の事業案を作成する。	「三の丸からプロジェクト」に関するテーマで分野横断型講座を実施し、分野横断型講座の展開について検討する。
		新型コロナウイルスの感染拡大により年度当初予定していた新規イベントは中止を余儀なくされたが、開設した公式YouTubeで来館しなくとも視聴できる新しいスタイルの講座に取り組んだ。児童・生徒向けの常設展示紹介「けんぱくこどもチャンネル（KKC）ズッキーマッキー」シリーズ、美術講座とテーマ展解説会の性格を持つ「にちようはくぶつかん」シリーズのほか、企画展「会津のSAMURAI文化」では外部機関と連携したKKCの動画講座を配信した。また、文化に触れる機会を創出する新たな取組として、従来の館長講座に代わり、各界で活躍する外部講師を招く特別講座を開講した。これらにより新たな利用者層を獲得し、当館の発信力を高めた。次年度について、常設展の魅力向上のため、20回におよぶポイント展のミニ解説会を行う予定を立てた。 <b>計画どおり実施</b>	常設展の魅力を伝えるため企画した「ポイント展ミニ解説会」は、コロナ禍の影響で中止となる回もあったが年度内に18回開催。多岐にわたる常設展の魅力を多分野の学芸員の解説で気軽に楽しんでもいただく場となった。各界で活躍する文化人の知見に直接触れる機会となる「特別講座」は2年目となり、企画展等と関連するテーマ・講師で企画。好評を得て認知度があり、連続参加者が見られるようになった。3回目はコロナ禍の影響でオンライン無観客開催となったが国内外から参加があり、マスコミへの露出が重なったこととあわせて、当館を広く海外までPRする事業となった。 <b>計画どおり実施</b>	新型コロナウイルス対策を講じながら、テーマ展やポイント展をより楽しめる講座やワークショップ、ミニ解説会を多数実施し、常設展の魅力増進に努めた。また令和5年度事業案として、これまでの「三の丸からプロジェクト」の成果も活用し「若松城三の丸」を多角的に掘り下げる連続分野横断型講座「三の丸から講座」を計画した。 <b>計画どおり実施</b>	令和4年度に企画した連続分野横断型講座「三の丸から講座」を計4回実施した。1～3回目は館内の分野を横断する形で歴史分野を主体に美術分野、考古分野の学芸員等が講師を務め、4回目は外部講師に来ていただく形で、「若松城三の丸」についてそれぞれ掘り下げることができた。複数の分野が組むことで話題が広がり内容が充実する手応えが得られると同時に分野横断型講座のメリット、デメリットが具体的に今後展開を検討する材料を得ることができた。それらを踏まえ令和6年度事業案として、引き続き「三の丸から講座」を計画した。 <b>計画どおり実施</b>	
⑦ 新しい展示ストーリーの検討	将来の展示室改修に備えて、新しい常設展の展示ストーリーを検討する。 新設館など最新の情報を収集し、館外から意見を聴取する機会を設定し、常に最新の構想を準備しておく。	新しい展示ストーリーの検討を開始するとともに、新設館等の情報収集や、来館者モニターができる講座などを試行する。	新しい展示ストーリーの検討を開始するとともに、新設館等の情報収集や、来館者モニターができる講座などを試行する。	新しい展示ストーリーの検討を開始するとともに、新設館等の情報収集や、来館者モニターができる講座などを試行する。	新しい展示ストーリーの検討を開始するとともに、新設館等の情報収集や、来館者モニターができる講座などを試行する。	新しい展示ストーリーの検討を開始するとともに、新設館等の情報収集や、来館者モニターができる講座などを試行する。
		新しい展示ストーリーの検討を開始するとともに、新設館等の情報収集や、来館者モニターができる講座などを試行する。	新しい展示ストーリーの検討を開始するとともに、新設館等の情報収集や、来館者モニターができる講座などを試行する。	会津地域の文化観光拠点施設としての機能を強化するため、「三の丸からプロジェクト」に則した展示室の整備について検討する。	「（仮称）三の丸アベニュー」実現のため展示整備計画の検討を行う。	「（仮称）三の丸アベニュー」の実施設計に基づき、文化観光ゲートウェイの中核展示を完成させる。
		学芸員による常設展の既存の展示ストーリーの検証作業を開始した。会津大学との共同研究プロジェクトによる「鑑賞アプリ」の常設展示室への試験導入や展示資料を活かした最新の映像提供技術の情報を収集した。会津若松国際交流協会を来館者モニターとして、展示室の外国語表示や対応について意見交換を行った。 <b>計画どおり実施</b>	常設展示室の「展示ロビー」を3周遊へのゲートウェイ機能を果たす展示強化空間として再整備する方針を決定した。周囲にサテライト的に展開する「歴史・美術」展示室・「民俗」展示室・鶴ヶ城跡が望める「西レストコーナー」・「ビデオブース」の役割を明確にし、有機的に関連させることで一体的かつ文化観光のランドマークとなる空間「（仮称）三の丸アベニュー」の構築を目指す方針とした。 <b>計画どおり実施</b>	文化観光に資する博物館からの周遊の起点となる「（仮称）三の丸アベニュー」に係る展示強化基本計画について当館収集展示委員会の了承を得て、部門展示室「民俗」及び展示ロビーの実施設計業務を委託し、前者の設計について整備を完了した。 <b>計画どおり実施</b>	資料を基に幕末の若松城下を再現したジオラマを中心とするコア展示ユニット「あいづスタジアム」を整備し、プロジェクションマッピングやタッチパネルコンテンツにより会津若松文化観光の動機付けとなる展示強化を完成させた。 <b>計画どおり実施</b>	

⑧ 展示室以外の空間の有効活用	展示室以外の空間の活用案の検討と試行により、各フロアの魅力を引き出した、有機的な空間活用を実現する。 来館者が行きたい、過ごしたいミュージアムならではの空間をつくり、運営する。	無料空間のあり方、活用方法を検討し、エントランスホール、相談コーナー、レストランの新たな活用を試行する。	無料空間のあり方、活用方法を検討し、エントランスホール、体験学習室、視聴覚室の新たな活用を試行する。	無料空間のあり方、活用方法を検討し、無料空間の魅力を総合的に発信する。	無料空間のあり方、活用方法を検討し、館外の新たな活用を試行する。	無料空間のあり方、活用方法を検討し、博物館の魅力を総合的に発信する。
		無料空間のあり方、活用方法を検討し、エントランスホール、相談コーナー、レストランの新たな活用を試行する。	無料空間のあり方、活用方法、実現計画を検討し、エントランスホール、体験学習室、相談コーナーの新たな活用を試行する。	中・長期的な視点で無料空間のあり方、活用方法を検討する。検討内容も踏まえて、体験学習室の新たな活用を試行する。	体験学習室を活用した既存のプログラムを、「三の丸からプロジェクト」による同所の整備計画に応じてブラッシュアップし、実施する。また、前庭や雁木下、駐車場脇緑地などの敷地内館外の新たな活用を試行し、試行結果に基づき令和5年度以降の事業案を検討する。	雪国ものづくり広場「なんだべや」（旧体験学習室）を用いた既存のプログラムの更なるブラッシュアップとともに、他団体との協働事業の活動拠点、団体同士の交流拠点として活用し、結果を検証する。雪国ものづくり食堂「つきない」、駐車場脇緑地の活用方法案をまとめる。
		連携交流班において無料空間のあり方や活用方法を検討、オープンミュージアムビジョンを作成した。 試行として体験学習室を主な実践場所と想定し、館内協議・外部ヒアリングも参考に活用案をまとめ、福島県立会津工業高等学校建築インテリア科と連携した木製玩具の製作、当館収蔵資料を活用した撮影スポット設置等として実現した。 エントランスホールは、これまで体験学習室のみで実施してきたこともミニミニ博物館の会場の一部として活用、企画展にあわせてレプリカを用いた撮影スポットの設置など、新たな活用を試みた。 レストランでは、企画展と連動した作品展示等を行った。	新型コロナウイルス感染症予防対策を講じた上での無料空間のあり方、活用方法を検討し、体験学習室や相談コーナーを開室した。体験学習室は、学校等との連携成果の展示公開の場として活用したほか、人数制限・時間制限を行いながら大学と連携したワークショップ会場にするなど、オープンスペースとしての活用を試行した。また、使用を中止していた昔のおもちゃの遊び方を紹介する動画（「KKCおしのび殿さんぼ」シリーズ）を作成、配信するなど新たなコンテンツの開発も行った。 <b>計画どおり実施</b>	多様な利用者が各自の興味に基づき主体的に活動する場としての体験学習室、食を通して会津の文化を体験できる場としてのレストランの整備案を検討・立案し、三の丸からプロジェクトの令和4年度事業案に反映した。令和4年度の事業案を踏まえて、体験学習室で自由に読み聞かせができる絵本（視覚障がい者向け図書を含む）配備の準備を進めた。 また、三の丸からプロジェクトの一環で乳幼児を連れた来館者が楽しみながら利用できるベビーケアルームや視覚に障がいのある方も資料について学べる視覚支援観覧システムを導入した「さわりの展示ボックス」を体験学習室に設置。会津ものづくりが学べる空間としてレストランの整備も進めた。 <b>計画どおり実施</b>	「三の丸からプロジェクト」の体験学習室整備により広いスペースが確保され、「三の丸からプロジェクト」の「雪国ものづくりマルシェ」では複数のワークショップを同時開催して前回より多くの集客を得ることができた。加えてものづくり要素の強い空間として整備したことで、民俗講座「薫に親しむワークショップ」のような新規プログラムも企画・実施された。また、体験学習室の今後の運用について、ものづくりの作家、教員、家庭教育に携わる方等、多様な立場の外部の方によるワークショップを行い活用の方向性を得ることができた。 前庭および雁木下は「雪国ものづくりマルシェ」の売店場所として活用が定着し、活用を重ねる中でイベントの規模感の把握や電源等設備上の課題が明らかにになった。駐車場脇緑地は幼稚園に向けた学習プログラムの開催場所として活用。未就学児童の初めての博物館体験の場所として有用という認識を強めた。これらの実績に基づき令和5年度の事業案を検討した。 <b>計画どおり実施</b>	雪国ものづくり広場「なんだべや」での体験型プログラムにおいては博物館収蔵品を活用した空間づくりを行うことによって、博物館ならではの体験にブラッシュアップした。また、「なんだべや」で会津塗やからむしの作り手による滞在制作を実施し、新たな活用方法の試行を行った。協働団体の実践、交流の場として活用することで、魅力ある空間の創出につながった。事業後には振り返りを行い、成果や課題を検証した。 雪国ものづくり食堂「つきない」では、食とものづくりをつなぐ空間、体験学習活動の場としての活用方法を実践、検証した。 駐車場脇緑地については外構展示と組み合わせたワークショップなど、使用方法を検討した。 <b>計画どおり実施</b>
障がい者に寄り添った学習機会の促進	乳幼児や保護者に合わせた学習機会の促進	小学生に合わせた学習機会の促進	中学生に合わせた学習機会の促進	世代間交流を軸とした学習機会の促進		
⑨ 多様な利用者層に対応したプログラムの実施	人が出会い、学び合い、表現できる場をつくる。年度ごとに対象を定めて効果的なプログラムを計画・実施する。	障がい者に寄り添った学習機会の促進する。	障がい者および乳幼児や保護者に合わせた学習機会の促進	障がい者および乳幼児や保護者に合わせたプログラムの試行結果を受け、定着のための改善、制度化を進める。また、小学生に合わせた学習機会の促進を図る。	幼稚園・保育園等との連携により乳幼児向けの通年プログラムを考案の上、実施する。また乳幼児やその保護者に向けたプログラムを大学等各団体と連携の上考案し、実施する。 支援学校との連携により、障がいのある児童・生徒に向けたプログラムを考案し、実施する。	支援学校や障がい者に関わる諸団体、幼稚園・保育園との連携・協働を強化し、障がいをもつ児童・生徒、障がいのある方、および未就学児とその保護者向けのプログラムをブラッシュアップするとともに、多文化・多世代の交流を生むプログラムを試行し、大学・他団体・個人との協働を促進する。
		オープンミュージアムビジョンを元に、計画的に支援学校や社会福祉法人、病院等の視察を実施した。 視覚障害を持っている方に、当館の展示やイベントに参加していただいたり、当館への意見を頂く機会を得た。 それらに基づき、支援学校や社会福祉法人等の団体の利用プログラムを作成、実施した。	障がい者の学習機会の促進は、当館が事務局を務めるライフミュージアムネットワーク実行委員会のプログラム開発の中で、オンライン見学や動画を活用したミュージアム観覧を、会津特別支援学校中等部やIT企業等と協働して実施した。幼稚園・保育園等の低年齢層には、年齢に応じた解説プログラムを作成・提供した。また、小学生以下の子どもたちが保護者と楽しみながら学べるワークショップを会津大学短期大学部幼児教育学科と考案し、学習機会を設けた。 <b>計画どおり実施</b>	県内の支援学校と連携し、障がいをもつ児童生徒に向けたプログラムの多様化を進め、定着に繋がった。遠隔操作ロボット等のICTの活用は博物館利用のハードルを下げ、障がい者や高齢者など来館が困難な層の博物館利用が可能となった。 乳幼児に対しては企画展等の対話型鑑賞や季節感を取り入れたワークショップを実施。幼児を対象としたプログラムの精度が上がり、通年展開の実績を得た。 会津若松市内の小学校との連携により、あるテーマによる一定期間内の連続した学習プログラムを新たな取組として実施。また、ライフミュージアムネットワーク実行委員会主催事業で福島県内の適応指導教室との連携により不登校児童への連続した学習プログラムも実施。上記により博物館活用による小学生への学習機会提供の可能性を広げた。 <b>計画どおり実施</b>	乳幼児向けのプログラムを、連携する近隣の子ども園と通年で実施し新たなプログラムの考案につながることができた。また、移動にバス利用を伴う新規の子ども園との連携をスタートし園内での学習と博物館の活用を繋げるプログラムを考案、実施した。大学等との連携も深め、冬の「こどもミニミニはくぶつかん」の試行や、読み聞かせの協働団体としての新規参加につながることができた。 支援学校との連携は、先生方との丁寧な話し合いにより障がいに応じたプログラムを考案し、通年で実施するとともに、改善を重ねることができた。 <b>計画どおり実施</b>	会津支援学校、近隣こども園との学習プログラムやゲストティーチャー、未就学児向け事業では、学校・園との意見交換会を実施するなど連携を深めるとともに、協働団体・個人の参画を得て、これまで以上に地域への理解を深めるプログラムを実施することができた。 また、支援学校と特別養護老人施設をオンラとインでつなぐプログラムや、国際交流協会との連携など、多世代交流、多文化交流を生むプログラムを実施することができた。 <b>計画どおり実施</b>
		ボランティアを導入している他館の情報を収集する。	ボランティアとの窓口になる職員（ボランティアコーディネーター）を配置する。	前年度に収集した情報をもとに、ボランティア募集要項および活動メニューを検討する。	募集要項に基づいてボランティアを募集し、活動を開始する。	初年度の活動を踏まえて、新しい活動メニューを考案し、試行する。
ボランティアに関する研修等を受けた館職員が窓口となり、受入体制を整えて、ボランティアを募集する。 また博物館とボランティアが協働しつつ、新しい活動メニューを考案し、試行する。	ボランティアを導入している他館の情報を収集する。	ボランティアとの窓口になる職員（ボランティアコーディネーター）を配置し、ボランティアのありべき姿と協働について議論する。	ボランティアとの協働を検討し、具体的な活動内容を考案、一部を試行し、結果を検証する。	資料整理ボランティアのあり方、活動内容についてボランティア同士が共有する機会を設けることや、募集の方法についても更に検討する。	分野ごとに資料整理ボランティアの活動状況を把握・整理し、活動状況に応じた募集の方法を検討する。	
	インターネットに公表されている他館の情報収集をはじめた。 またライフミュージアムネットワーク2019への参画により、同事業の県外リサーチで大阪市立自然史博物館での利用者による自主的な活動、満蒙開拓平和記念館での高校生によるボランティア活動について知見を得た。	ボランティア対応職員を配置した。 ボランティアの目指すべき姿と現時点での課題等をボランティアと作業する各分野担当学芸員と共有した。また新しくできた友の会のサークル（食文化サークル）において、将来ボランティア活動を視野に入れていくことを確認した。協働について改めて意見交換を行った。 <b>計画どおり実施</b>	ボランティアのあり方について協議し、現行の資料整理ボランティアの性格を尊重し、その活動を支援する方向性を検討した。 新たな展開として、従来博物館友の会の古文書愛好会メンバーのみであった歴史分野担当の資料整理ボランティアを令和4年度から一般からの参加を加える方向として資料整理ボランティア参加の枠組みを広げた。 <b>計画どおり実施</b>	テーマ展の解説会を学芸員とボランティアが行うことで資料整理ボランティアの活動を広く伝えることができたが、資料整理ボランティアのあり方、活動内容についてボランティア同士が共有する機会を十分に設けるには至らなかった。また、ボランティアに関する内規の改訂を行い、年間を通して活動できる体制を整えた。歴史資料整理ボランティアとして古文書愛好会メンバー以外からの参加を試行的に受け入れ、その実績を踏まえて新規のボランティア募集のあり方について検討した。 <b>一部計画どおり実施</b>	分野ごとに活動状況の把握を行った。各分野が求める人材や公募等の適した募集方法について一部ヒアリングを行ったが、課題の抽出にまで至ることができず、募集方法の検討を行うことができなかった。 <b>一部計画どおり実施</b>	

⑪ 利用者の自主的な文化活動支援	博物館を活用した自主的な活動の受け皿をつくり、利用者の学ぶ意欲を促進する。	館の講座等を足がかりに、新しい継続的な学習の形（サークル等）を提案する。	館の講座等を足がかりに、新しい継続的な学習の形（サークル等）を提案しする。	引き続き、新しい継続的な学習の形（サークル等）を提案する。活動が組織されたものについては、その学習や運営を支援する。	引き続き、新しい継続的な学習の形（サークル等）を提案する。活動が組織されたものについては、その学習や運営を支援する。	引き続き、新しい継続的な学習の形（サークル等）を提案・支援する。また、こうした団体と協働して事業を行う。
		館の講座等を足がかりに、新しい継続的な学習の形（サークル等）を提案する。	館の講座等を足がかりに、新しい継続的な学習の形（サークル等）を提案する。また協働のあるべき姿を議論し共有する。	利用者の自主的な文化活動の支援のあり方について検討する。あわせて既存の活動（サークル等）の自主的な学習や運営を支援する。	既存の文化活動（友の会サークル等）の学習や運営を支援する。加えて、新規の支援のあり方について検討する。	友の会サークル等の学習や運営を支援するとともに、今後のサークル活動のあり方について議論する。
		利用者によるサークル活動が活発な他館（十日町市立博物館等）への当館友の会旅行をサポートし、利用者同士の交流の機会とすると共に当館友の会活動の将来の指針を得た。 また、防災食などをテーマにする新しいサークルの開設について当館友の会と相談をはじめた。	当館の民俗講座、防災講座の実績を踏まえ、友の会のサークルとして新たに食文化サークルを提案し、試行的に活動を開始した。将来的にこのサークルの参加者が講師となり学習の輪が広がることで継続的な活動に繋がるように参加者に提案し、目標として共有している。また、美術講座を足掛かりに、仏像鑑賞サークルの立ち上げも協議している。協働について意見交換を行った。 <b>計画どおり実施</b>	利用者の自主的な活動のあり方について班内で検討した。サークルによってはコロナ禍の影響により活動の中止が続き、退会者が出るなどの影響が出たが、新たに活動をはじめた「仏像を研究し旅する会」や「考古学倶楽部」を含め、福島県立博物館友の会に所属する既存のサークル活動の自主的な学習、運営を支援した。 <b>計画どおり実施</b>	友の会サークルに担当の学芸員が参加し、適宜助言を行うなどして活動支援を行った。「化石鉱物探検隊」の成果展の開催、継続的な「古文書愛好会」の活動に加え、新たに組織された「考古学倶楽部」「仏像に親しむ会」の活動に学芸員が伴走し、サークル活動を軌道に乗せる支援を行った。また、新規支援のあり方について、担当班内で検討を行った。 <b>計画どおり実施</b>	友の会の運営を支援するとともに、高齢化に伴う厳しい現状も把握された。サークル活動は非常に活発であり、サークル内から他分野サークルと連携したワークショップの提案がなされるなど、「みんなでつくるイベント」等との協働の可能性も見出された。友の会、サークル活動の現状を把握し、今後のあり方や協働事業との関係について連携協働班内で議論を行った。 <b>計画どおり実施</b>
⑫ 協働による新たな事業運営の枠組みの構築	利用者との協働による事業運営体制について開かれた検討と試行を行い、共催、後援事業などを含む協働の多様な枠組みを設け、協働の層を厚くする。	協働による新たな事業運営の枠組みを検討し、館内外を対象に意見交換会を開催する。	協働による新たな事業運営の枠組み案を作成し、運営体制案（人員の配置等）もあわせて検討する。	協働による新たな事業運営の枠組み案に基づき、事業を試行する。	前年度の成果と課題に基づき運営体制の強化を図り、さらなる事業の試行を重ねる。	協働による新たな事業運営の枠組み確立し、継続的に事業を実施する。
		協働による新たな事業運営の枠組みを検討し、館内外を対象に意見交換会を開催する。	協働のあるべき姿を議論し、協働による新たな事業運営の枠組み案を作成し、運営体制案（人員の配置等）もあわせて検討する。	協働による新たな事業運営の枠組み案をさらに検討し、一部を試行する。	イベント等を外部の団体等と企画・運営する枠組みを検討し、一部を試行する。	他団体・個人との協働によるイベント・プログラム等の企画・運営の枠組みを整理し、試行を重ねて成果・課題の検証を行いながら、協働制度の準備を開始し、事業の充実を目指す。
		利用者との協働による事業運営について連携交流班内で協議し、体験学習室を試行の場とする事業案について検討した。 他団体との協働や連携による事業運営の枠組みを検討、共催・後援事業の規則を見直し、改定案を作成した。	前年度の最終館長講座の記録動画の上映会を行い、その参加者から当館のあるべき姿について意見をいただいた。あわせて当館の事業運営に繋がる協働のあり方について館内での協議を進め、事業運営の枠組み案を検討し、運営体制案についても事業運営案と合わせて引き続き検討することになった。 <b>計画どおり実施</b>	協働による新たな事業運営の枠組みについて班内で検討した。当館が事務局を務めるライフミュージアムネットワーク実行委員会主催事業でリサーチを行い、事業趣旨の賛同者に児童・生徒向けワークショップへの参加を呼びかけた。 <b>計画どおり実施</b>	外部の団体等との協働による新たな事業運営の枠組みを検討し、運営協議会等で協議し、次年度の事業案に反映した。また他団体との事業の企画・運営の試行として、学校団体向けの学習プログラム対応、冬の「こどもミニミニはくぶつかん」のワークショップの企画・運営を行い、効果と実績の検証につなげた。 <b>計画どおり実施</b>	協働事業のあり方について、協働団体と丁寧にも共有し、「みんなでつくるイベント」として各イベントを実施した。実施後は各団体と振り返りを行い、成果や課題について検証を重ねた。イベントの他、会津支援学校との学習プログラムやゲストティーチャーに協働団体に参加いただいた。イベントに限定しない協働のあり方の試行となった。検証結果をもとに、協働制度の構築に着手した。 <b>計画どおり実施</b>
⑬ 情報の効果的な周知	広報戦略の立案に基づき、当館発行の印刷物・WebおよびSNS・マスコミ・行政の広報媒体等、ツールの特徴を活かした広報により情報周知の徹底を図る。	広報戦略の立案に基づき、WebおよびSNS運用を充実させ、あわせて印刷物の内容見直す。	広報戦略の立案に基づき、WebおよびSNSの特徴による運用の差別化を実施、他団体との連携による広報ツールの充実を図る。	広報戦略の立案に基づき、マスコミへの情報提供ルートの検討を行い、マスコミへの情報提供の充実を図る。	広報戦略の立案に基づき、総合的な広報を実施。あわせて広報効果の検証を試みる。	広報戦略の立案および前年度の検証に基づき、すべての広報ツールの特徴による運用の差別化と実施を行う。
		広報戦略の立案に基づき、WebおよびSNS運用を充実させ、あわせて印刷物の内容を見直す。	広報戦略の立案に基づき、WebサイトおよびSNSの特性に応じた運用の差別化を実施。他団体との連携による広報ツールの充実を図るとともに、展示テーマに適した広報展開を実施する。新広報紙「なじよな」が魅力的な紙面となるよう工夫し、発行を軌道にのせる。	広報戦略の立案に基づき、マスコミ等への情報提供ルートの検討を行い、マスコミへの情報提供の充実を図る。	広報戦略の立案に基づき、効果的な広報活動を実施する。あわせてアンケート等の活用により広報効果の検証を行う。	広報ツールの特徴を整理し、それを踏まえた運用を行う。新規の広報ツールの採用、活用についても検討しながら、より効率的な広報活動への改善を進める。
		TwitterやFaceBookの更新頻度を上げたことに加え、シリーズ化するなど投稿内容の工夫も凝らした結果、大きな反響があり、1,000人を超えるフォロワーも獲得した。 また既存の広報誌の紙面や発行回数を見直し、より見やすく、幅広い層に情報が届きやすい紙面を検討した。	企画展や各イベントの内容に応じた広報戦略を立て、広報物の送付先や広報コンテンツ、発信方法等を検討し、広報活動を行った。総括的な情報発信ツールであるWebサイト、速報性の高いTwitter、読み物として機能するFacebookなど、それぞれの特性に応じた使い分けも行った。またコロナ禍における情報発信として、新たに公式YouTubeを立ち上げ、こども向け教育番組、美術ファン層に向けた教養番組、展示ドキュメンタリーなど多様なニーズに応える情報発信ツールとした。 夏の企画展「会津のSAMURAI文化」では、会津の武家文化ゆかりの3施設と連携し、SAMURAI文化を紹介する動画の作成配信、SNSによる相互広報を行った。 新広報紙「なじよな」は、展示担当者のインタビューや収蔵庫内の資料紹介等、通常の情報発信と異なる切り口で紙面を構成し、当館の多様な魅力を伝えた。 <b>計画どおり実施</b>	広報戦略会議を行い、企画展の内容に応じた広報内容の検討を行った。従来のマスコミ向けの企画展説明会に加え、研究成果の公表のための記者会見を初めて実施した（オンライン1回含む計2回）。また、年度当初にマスコミ各社を訪問して新年度事業案の説明を行い、マスコミとの関係性の強化と情報提供ルートの充実を図った。 <b>計画どおり実施</b>	企画展の広報会議に基づき、従来の印刷物による広報だけでなく、Twitter企画（#福島写真美術館等）やイベント型広報（着物割引等）や物品配布（隊士カード）やラッピングカーといったものを組み合わせた総合的な広報を実施した。広報効果の検証として、Twitterの広報効果を春企画展で、Instagramの広報効果を秋企画展で分析した。 <b>計画どおり実施</b>	印刷媒体（ポスター、チラシ、広報紙「なじよな」、年間展示案内等）での県内向けの幅広い周知に加え、各種SNSをその特性に合わせた使い分けで運用した。また、福島県教育庁のnoteといった、新たな広報ツールの採用・活用を進めた。より効率的な広報活動への改善は進んだが、メンバー・資金面の不足による課題が残った。紙媒体の広報ツールは引き続き製作・活用するが封入作業の効率化を図るため、次年度のアウトソーシングを計画した。 <b>計画どおり実施</b>

<p>⑭ 親しみやすさと認知度の向上</p>	<p>広報物および掲示物、サインのデザイン精度を上げ、イメージの統一感を図る。 様々な視点による多様な博物館紹介を試み、親しみやすさの向上を図る。</p>	<p>掲示物のデザインの統一感の創出を図り、広報物のデザインの検討と試行を行う。博物館の「人」の紹介により親しみやすさの印象を向上させる。</p>	<p>掲示物のデザインの統一感の創出を図り、広報物のデザインの検討と試行を行う。博物館の「場」の紹介により親しみやすさの印象を向上させる。</p>	<p>印刷物のデザインの統一感の創出を図る。博物館の「人」の紹介により親しみやすさの印象を向上させる。</p>	<p>館内サインのデザインを検討する。博物館の「場」の紹介により親しみやすさの印象を向上させる。</p>	<p>館内サインのデザインの統一感の創出を図る。博物館の「コト」の紹介により親しみやすさの印象を向上させる。</p>
		<p>掲示物のデザインの統一感の創出を図り、広報物のデザインの検討と試行を行う。博物館の「人」の紹介により親しみやすさの印象を向上させる。</p>	<p>「三の丸からプロジェクト」を含め広報デザインの統一感の創出を図る。博物館の「人」「モノ」「コト」「場」の紹介により親しみやすさの印象を向上させる。</p>	<p>イメージ戦略のために館内掲示物のデザインを検討する。博物館の魅力を様々な視点で紹介し、親しみやすさを向上させる。</p>	<p>シンボルマークの活用等を通じて、広報物の統一感を向上させる。併せて、各種の広報ツールやイベントと連動させることで親しみやすさを向上させるための普及活動を行う。</p>	<p>三の丸からプロジェクトのロゴ策定にあわせて、福島県立博物館の和文・英文表記フォントを固めた。これらを活用することで、広報物の統一感の向上を図った。また引き続き、シンボルマークを館内行事のチャシヤイベントに活用することでその認知度と、館への親しみやすさの向上を計った。一方で、具体的な普及活動の展開までは至らなかった。</p> <p><b>一部計画どおり実施</b></p>
<p>⑮ 県内の各機関・団体との連携による新たな文化活動の創造</p>	<p>当館が県内の文化ネットワークの拠点の一つとしてより効果的に機能することで、既存の連携の活性化や、新たなネットワークを構築する。それらを基盤に、博物館の文化資源を活用し、観光地・会津に立地する特性を活かして、新しい文化活動を創造する。</p>	<p>既存の連携事業の活性化方策を検討・試行し、あわせて新たな連携先（施設・団体等）の発掘と連携方法の検討を行う。</p>	<p>既存の連携事業の活性化方策を検討・試行し、あわせて新たな連携先（施設・団体等）の発掘と連携方法の検討を行う。</p>	<p>既存の連携事業の活性化方策を検討・試行し、新たな連携先（施設・団体等）との新規連携事業を検討・実施する。</p>	<p>既存の連携事業の活性化方策を検討・実施し、新たな連携先（施設・団体等）との新規連携事業を検討・実施する。</p>	<p>複数の連携先を組み合わせた連携事業を検討・試行する。</p>
		<p>既存の連携事業の活性化方策を検討・試行し、あわせて新たな連携先（施設・団体等）の発掘と連携方法の検討を行う。</p>	<p>「三の丸からプロジェクト」の共同申請者をはじめとする該当施設・団体等との連携により、文化観光拠点としての役割を果たすべく同プロジェクトを実施する。</p>	<p>「三の丸からプロジェクト」や新規移動展（仮）、その他県内各機関・団体との連携事業での助言・指導などを通じて、新たな文化活動の創造に繋げる。</p>	<p>「三の丸からプロジェクト」において連携事業を強化・活性化し、新たな文化活動の創造に繋げる。また、同プロジェクトの自走に向けて連携した運営の仕組みを検討する。</p>	<p>当館が県内の文化ネットワークの拠点の一つとしてより効果的に機能することで、既存の連携の活性化や、新たなネットワークを構築する。それらを基盤に、博物館の文化資源を活用し、観光地・会津に立地する特性を活かして、新しい文化活動を創造する。</p> <p>企画展「興福寺と会津」にあわせ、「会津の文化×地域連携プロジェクト」を基盤に会津の仏教文化を観光資源として活かす取り組みを会津若松市、会津若松観光ビューローと行った。福島県博物館連絡協議会の事業の活性化を試み、新たに資料取り扱い研修を実施した。未就学児支援事業「博物館でも読み聞かせ」においてあらたに会津大学短期大学部との連携に取り組んだ。当館無料空間で開始した福島県内文化施設のPR展示では、当館を拠点とした発信を行い、新たな連携を試行した。</p> <p>福島県博物館連絡協議会の事業内容の充実を理事会等で協議、新設施設の見学研修、災害時の資料取り扱い研修を実施した。また「会津の文化×地域振興プロジェクト」協議会を母体に、新たに只見川電流流域振興協議会、福島県観光物産交流協会を連携先とした「福島県立博物館を活用した会津文化観光拠点計画」を策定し、国の認定を受けて事業をスタートさせた。</p> <p><b>計画どおり実施</b></p>
				<p>三の丸からプロジェクトの「雪国ものづくりマルシェ」「若松城下まちなか連携事業」の開催や「雪国ものづくりレストラン」「周遊促進発信事業」を、共同申請者との情報・資料提供、広報協力をはじめとする連携により実施。また「体験型プログラム」は、各団体等との連携により新たな文化資源の活用の可能性を提示できた。「若松城下まちなか連携事業」は、当館の企画展と連動する周遊促進事業として会津若松市内の歴史的建造物（登録有形文化財：建造物）の新たな利活用を実践し、各会場や運営団体と新たな文化活動の創造の可能性を共有する機会ともなった。三の丸からプロジェクト以外にも、夏の企画展で会津若松市が事務局を務めるナイトタイムエコノミー推進協議会と連携して事業を行うなど、各観光団体との連携により、文化観光拠点としての整備と活動の実績をあげることができた。</p> <p><b>計画どおり実施</b></p>	<p>「三の丸からプロジェクト」では共同申請者、各文化団体と連携した文化発信、新たな体験型プログラム構築を行った。博物館収蔵資料活用アウトリーチ事業では、連携館と協議を重ね、震災遺産を活用した企画展を北塩原村と富岡町で開催。今後のアウトリーチ事業で活用できるパッケージの創出につながった。また、当館収蔵写真作品を貸し出し、複数会場写真展を実施。開催各施設の協働、新たな相互理解が生まれた。その他、博物館外の機関との連携による中学校向け授業案の作成・実践、学びの場の創出、文化資源を活用したツアーの試行を行った。</p> <p><b>計画どおり実施</b></p>	<p>「三の丸からプロジェクト」まちなか連携事業において、当館部門展示室（民俗）のリニューアルや夏の企画展と連動した連携展示やイベントを開催し、歴史的建造物の新たな魅力発信につながった。3エリア周遊のためのツアー造成事業では、博物館と御薬園をユニークバニユーとして活用し、これまでにない使い方による新たな価値の発信を行った。個別の事業について、関係者、講師、出店者等をまじえ、自走に向けた体制構築の検討を行うとともに、三の丸からプロジェクト全体の自走化に向けて共同申請者と協議を行った。</p> <p><b>計画どおり実施</b></p>

⑩ 震災遺産の展示公開と利活用	年間を通して観覧できるように、震災遺産を常設展示する。博物館資料「震災遺産類」の保存・活用に向けて、核となる職員を配置した新分野を確立する。	新分野確立に向けて館内で合意形成する。常設展における震災遺産の利活用の考え方について館内で整理する。	新分野を確立する。新たな常設展示の試行として企画展を開催する。	新分野の教育普及を充実する。震災遺産を盛り込んだ新たな常設展示プランを作成する。	常設展示について館内での合意を形成する。	「震災遺産」の常設展示を試行する。
		新分野確立に向けて館内で合意形成する。常設展における震災遺産の利活用の考え方について館内で整理する。	新分野を確立する。新たな常設展示の試行として企画展を開催する。	災害分野の教育普及を充実させる。さらに防災教育の視点を含んだポイント展、特集展を実施し、それらの成果を活かした新たな震災遺産の常設展示プランを検討する。	震災遺産の常設展示について、ワークショップ等を通して館内外からの意見を集約し、館内での合意を形成する。	収集展示委員会で展示構成を協議し、次年度以降の常設展の設置に向けて資料展示を試行する。
		通史の中に東日本大震災を位置づけるための共通理解を図り、震災遺産の常設展示での利活用を検討するため、エネルギー開発や災害史、民俗学的観点から毎月館内研修を開催した。	館内で新分野のあり方を議論し、運営協議会、収集展示委員会から意見をいただき、次年度災害分野の確立が決定した。企画展「震災遺産を考える次の10年へつなぐために」では、これまでの活動の蓄積を紹介しつつ、既存の常設展示への接続のしかたも見据えながら展示を構成した。また企画展に合わせて活動をまとめた記録誌を初めて刊行し、常設展に組み込む際の基礎資料と位置づけた。 <b>計画どおり実施</b>	ゲストティーチャー13回1733人、講師派遣9回154人と学校や公民館での教育普及を充実させた。ポイント展・特集展も教育普及的な内容を加味して実施した。また、会津若松市危機管理課や会津自然の家など、他機関と連携した教育普及活動も実施することができた。また常設展示プラン案を作成し、議論を始めた。 <b>計画どおり実施</b>	ゲストティーチャーのアンケートや 解説員とのワークショップを通じて、博物館の強みを活かした展示内容について意見を集約した。また博物館実習において、学生たちへの課題として震災遺産を含む現代の展示提案を行い、意見等を集約した。館内の関係分野芸員や他館の近現代担当学芸員とも意見交換を行い、学芸員会議にて展示の構成や進捗を共有した。博物館収蔵資料活用アウトラーチ事業で震災遺産を活用した関係機関と協議を重ねて2会場で企画展を実施し、常設展示のための知見を得た。成果の一部は全国科学博物館協議会研究発表大会にて報告した。 <b>計画どおり実施</b>	収集展示委員会で展示構成を諮った。令和6年度12月以降の常設展設置に向けた資料調査などを行った。資料展示の試行としてポイント展を利用し、震災遺産の展示を3回行った。特に年度末の展示については、県会津地域振興局の追悼イベントと連携させたことで、特に関心の高い来館者に見ていただく機会となった。 <b>計画どおり実施</b>
⑪ 地域社会の現状への貢献	これまでの博物館活動の蓄積、博物館の可能性を活かしながら、多様性に対応した博物館であることを意識した博物館活動により、博物館の新たな役割・機能を拡張する。博物館ならではの手法で、過疎化、高齢化等地域が抱える課題に向き合い、地域社会の未来に寄与する博物館活動を試行・実施する。	子ども、障害者、高齢者、交通弱者等、様々なタイプの人々に対応した、博物館の資料等を活用したプログラムを考案、試行する。	子ども、障害者、高齢者、交通弱者等、様々なタイプの人々に対応した、博物館の資料等を活用したプログラムを考案、試行する。	子ども、障害者、高齢者、交通弱者等、様々なタイプの人々に対応した、博物館の資料等を活用したプログラムを考案、試行する。	子ども、障害者、高齢者、交通弱者等、様々なタイプの人々に対応した、博物館の資料等を活用したプログラムを考案、試行し、試行の成果と課題の検証を行う。	精度の高いプログラム、運営ノウハウを確立し、博物館機能としての定着を図る。
		子ども、障害者、高齢者、交通弱者等、様々なタイプの人々に対応した、博物館の資料等を活用したプログラムを考案、試行する。	子ども、障がい者、高齢者、交通弱者等、様々なタイプの人々に対応した、博物館の資料等を活用したプログラムを考案、試行する。	博物館の手法で、地域の文化施設との連携、将来世代を含む多世代との協働を通して、様々なタイプの人々に対応し、地域の社会的課題に向き合うプログラムを考案、試行する。	子ども、障害者、高齢者、交通弱者等、様々なタイプの人々に対応した、博物館の資料等を活用したプログラムを考案、試行し、試行の成果と課題の検証を行う。	博物館的手法を通して、様々な困難を抱えた方が地域や文化と出会うプログラムを構築し、県内文化施設等のネットワークを通じて、ノウハウの共有を行い、社会的課題に向き合うためにミュージアム機能を拡張する。
		当館が事務局を務めるライフミュージアムネットワーク実行委員会主催のライフミュージアムネットワーク2019に参画する中で下記の実績を得た。 ソーシャルインクルージョンをテーマとしたオープンディスカッションを開催。障害のある方にとってミュージアムが利活用しやすい場であるための議論を行った。 当館を発着とし奥会津地方のミュージアムをめぐるスタディツアーに視覚障害のある方にご参加いただいたことにより、視覚障害のある方によるミュージアムの利活用の課題を検証し、次年度のプログラム開発につなげる素地をつくった。 <b>計画どおり実施</b>	様々な理由により来館が難しい方に博物館体験を届ける試行として、会津特別支援学校中等部・会津支援学校竹田分校・県内複数のミュージアムと協働し、オンライン見学や動画等の通信技術による手法と実物資料の持ち込み、出前授業など実体験による手法を組み合わせたプログラムを考案・実施した。また高齢者福祉施設におけるミュージアムによる回想法プログラム事業に学芸員が参画し、実施に協力した。 <b>計画どおり実施</b>	福島県内の4拠点で、地域の方、地域の文化施設、アーティストや研究者と共に、その地域・拠点が抱える社会的課題に対して向き合うアートワークショップを実施した。高校生を含む多世代の参加、長期的視点でのリサーチ、自然との共生、多様な人々の居場所づくりなどを通して、持続可能な地域づくり、多様な声に耳を傾ける空間（ポリフォニックスペース）の創出を目指すプログラムとなった。 <b>計画どおり実施</b>	適指指導教室の児童に向けて、当館の展示の対話型鑑賞、年中行事などをテーマにしたワークショップを通年に渡りほぼ毎月実施。通年での活用の試行となった。 福島芸術計画（県文化振興課事業）では、中山間地対応事業として昭和村のこどもたちと写真ワークショップおよび写真展を開催。過疎高齢化が進む地域の社会課題に対して、専門家の知見を取り入れながら、博物館的手法で何ができるか試行・検証した。また、聴覚障害のある方に当館の利用に関するヒアリングを行い、聴覚障害のある方に向けた手話通訳を伴う企画展解説会を試行。成果・課題の検証を年度末に行った。 <b>計画どおり実施</b>	視聴覚障がい者の観覧支援を行うにあたり、福島県立視覚支援学校や福島県立点字図書館、支援団体と連携し、知見を共有することができた。 福島芸術計画（県文化振興課事業）中山間地対応事業では、アーティストと只見ブナと川のミュージアム、当館が互いの専門性を活かして連携し、こどもたちが地域の自然を感じるワークショップを実施した。また、会津支援学校において喜多方市文化課の協力のもと、地域の文化財である会津型を活用したワークショップを実施した。過疎高齢化や障がいといった社会が抱える課題に対して、「地域を知る」という博物館的手法を通して向き合い、成果展や記録集を通して発信を行った。 <b>計画どおり実施</b>
⑫ 施設の安全で快適な環境整備	入館者が安全で快適に利用できるように、施設・設備の点検結果に基づいて、危険箇所・不良箇所を改修するなど、適正な施設の維持管理に努める。 バックヤードに耐震対策を施し、利用者及び職員の安全を確保する。	避難訓練にあわせた、バックヤードでの安否確認の実施と、図書室からの避難経路への資料落下を防ぎ、安全確保を行う。	バックヤードのうち研究室・図書室の災害発生時および避難時のリスクアセスメントを検討する。	前年度避難訓練と、避難経路に加え、作業室、第一、第五収蔵庫からの避難経路への資料落下を防ぎ、安全確保を行う。	前年度避難訓練を踏まえた上で、第二収蔵庫の避難経路への資料落下を防ぎ、安全確保を行う。	前年度避難訓練を踏まえた上で、二階収蔵庫での避難経路への資料落下を防ぎ、安全確保を行う。
		避難訓練にあわせたバックヤードでの安否確認の実施と、図書室からの避難経路への資料落下を防ぎ、安全確保を行う。	バックヤードのうち研究室・図書室の災害発生時および避難時のリスクアセスメントについて検討する。	前年度発生した福島県沖地震をうけ、災害発生時のリスクアセスメントを改めて行い、結果に基づいた行動マニュアル・チェック項目を検討する。	2年連続となった福島県沖地震の対応と、前年度までのリスクアセスメント・検討をふまえ、勤務時間内外の具体的な行動マニュアルを策定する。	地震対応の具体策として、避難経路となる廊下や事務室等の点検・整理、収蔵庫内の落下防止チェックなど必要な対応を行う。コロナ対策緩和後に館内の各種サービス等を再開させ、快適な施設・空間の回復に努める。
		6月18日に、会津若松消防署の協力を得て、AED操作研修と自衛避難訓練を行うとともに、避難経路の安全確認を行った。 また、自動火災報知器設備を更新するなど、設備の老朽化対策に努めた。 <b>一部計画どおり実施</b>	研究室や図書室の安全面でのリスクの洗い出しは達成できていないが、重点目標②に合わせ、避難経路確保のための図書落下防止措置を検討した。また令和3年2月に発生した福島県沖地震による博物館被害状況を共有し、地震発生時の行動指針について検討を行った。 <b>計画どおり実施</b>	福島県沖地震をふまえ、改めて館内（特にバックヤード）の地震発生時のリスクについて確認し、避難経路の安全を確保するための不用物品や存置品の処分や整理を積極的に行うとともに、非常時の対応について「福島県地域防災計画」を基に館内で検討した。 <b>計画どおり実施</b>	「勤務時間外に発生した地震災害に対する職員行動マニュアル」および教育庁（教育総務課）通知をもとに博物館における課題を抽出し、博物館独自の行動マニュアルを策定した。館内各所に防災ヘルメットを配置し、非常時への備えを整えた。 <b>計画どおり実施</b>	事務室棚上整理について着手し、震災等対策の意識づけを行った。コロナ対策として閉鎖していた展示室内の南レストコーナーを再開させ、コロナ前に使用していた冷水器を撤去してウォーターサーバーを新設するなどサービスの回復に努めた。 <b>計画どおり実施</b>

## 2. 数値目標

使命・活動方針に沿って、福島県立博物館の社会的な貢献度をはかる指標として数値化できる目標を設定し、年度ごとに実績を公表します。

令和5（2023）年度末

区分		令和元	令和2	令和3	令和4	令和5	備考
①館内事業利用者数 (展示・行事)	目標	90,000	90,000	90,000	100,000	110,500	
	実績	120,376	60,416	84,241	163,189	<b>76,779</b>	令和5未達成
②館内事業利用者数 (特別プログラム)	目標	—	—	—	3,500	4,000	
	実績	4,930	3,009	3,556	5,772	<b>2,763</b>	令和5未達成
③館外事業利用者数 (学校・公民館事業等)	目標 (③④合計)	1,800	1,800	1,800	2,000	2,000	
	③実績	1,823	2,188	2,605	4,416	<b>4,611</b>	
④館外事業利用者数 (館外で行った当館主催事業)	④実績	—	19	69	14,946	<b>12,121</b>	アウトリーチ事業含む
	実績 (③④合計)	—	2,207	2,674	19,362	<b>16,732</b>	
実績合計 (①②③④合計)		127,129	65,632	90,471	188,323	<b>96,274</b>	

区分	年間目標	令和元実績	令和2実績	令和3実績	令和4実績	令和5実績	備考
資料情報の公開 (件数)	5,000	2,054	3,245	2,819	6,768	<b>13,393</b>	
研究成果の公表 (件数)	30	32	15	34	28	<b>30</b>	
行事の実施 (回数)	100	130	77	111	125	<b>105</b>	
ホームページ(アクセス件数)	430,000	391,990	304,261	368,789	485,372	<b>359,790</b>	令和5未達成
館外事業利用者数 (実行委員会・協議会事業等)	500	547	59	231	150	<b>237</b>	令和5未達成

(参考) 第3期中期目標から実績を集計し、今後目標値の設定を予定します。

区分	指標	令和元実績	令和2実績	令和3実績	令和4実績	令和5実績	備考
年間パスポート	販売数	988	1,737	968	971	<b>387</b>	
	利用者数	4,630	2,442	4,007	4,560	<b>2,363</b>	
Facebook	投稿件数	227	262	308	414	<b>67</b>	
	フォロワー数	1,135	1,248	1,338	1,419	<b>1,458</b>	
	エンゲージメント数	28,256	28,940	22,156	22,643	<b>8,728</b>	
twitter	投稿件数	309	280	410	358	<b>156</b>	
	フォロワー数	1,167	1,507	2,115	2,697	<b>2,915</b>	
	ツイートインプレッション数	3,103,652	1,131,054	1,175,482	845,762	<b>305,178</b>	
YouTube ※2020年度新規	動画数	—	50	35	11	<b>5</b>	
	チャンネル登録者数	—	182	291	389	<b>461</b>	
	視聴回数	—	10,006	10,526	8,911	<b>12,591</b>	

### 令和5（2023）年度の状況

本年度は第3期の最終年度に当たる。

**1 重点目標** 当初設定した計画内容について、14項目は「計画どおり実施」することができた。残りの4項目（①⑤⑩⑭）については「一部計画どおり実施」という自己評価で、部分的に残されたそれぞれの課題については、次期中期目標や次年度からの通常の業務の中で改善させていく見通しである（「博物館中期目標 第3期の総括」を参照）。

**2 数値目標** 8項目のうち、4項目については目標値に到達することができた。とくに③④館外事業利用者数については、三の丸からプロジェクトや博物館資料展示活用アウトリーチ事業、防災に関する講座等の利用者数の増加により目標を大きく上回った。また「資料情報の公開」の項目についても、目標値を大きく上回ることができた。一方で以下の4項目については、目標値に到達することができなかつたため、その詳細や要因等を以下に記す。

### 自己評価の詳細

#### 2 数値目標

○①館内事業利用者数（展示・行事）	利用者数の内訳を前年度（令和4年度）比で見ると、常設展は56%、企画展・特集展は28%に減少し、行事については109%とやや増加した。企画展利用者数（18,180人）については、前年度のような実行委員会方式の大規模な企画展がなかったため大幅減となり、その影響は常設展の数字にも及んだと考えられる。常設展利用者数（50,114人）について、遡ってみると、コロナ禍前の令和元年度以前は、年間50,000人前後で推移しており、本年度は、その水準にほぼ戻ったとみることができる。なお、2月以後については、総合展示室閉室の影響も一部考慮する必要がある。
○②館内事業利用者数（特別プログラム）	利用者数の内訳をみると、前年度に比べて大きく減少したのは「学校団体体験学習（学習プログラム含む）」であり（令和4：4,440名→令和5：1,306名）、その他のプログラムは前年度並みであった。令和2年度以降、コロナ禍の対応として、学校団体の展示室への入場人数調整のため学習プログラムを積極的に実施してきたが、本年度はコロナ禍の終息にともない、入館方法をグループ入館に戻す学校が増えたため、利用者数は減少した。当館としては、今後も学校団体の希望に応じて、学習効果の高まるプログラムの紹介は継続していく。
○ホームページ（アクセス件数）	アクセス件数は、令和4年度よりは少なく、令和3年度並みである。アクセス件数の増減は、展示・行事など館内事業利用者数の増減とほぼ比例している。企画展や催し物の情報は適宜更新し情報提供ツールとしては機能しているものの、積極的な情報発信は、おもにSNS等に注力して展開させるようにしているため、アクセス件数は横ばいで、当初設定した目標値までは達しなかった。
○館外事業利用者数（実行委員会・協議会事業等）	本年度は、対象事業が磐梯山ジオパーク事業（136名）、ふくしまサイエンスぷらっとフォーム事業（101名）のみであったため、目標値には達しなかった。そもそも実行委員会方式の事業は、その性格により、参加者が多く見込めるものと見込めないものがあり、また補助事業であった場合、採択されない場合は事業自体を実施することができなくなるため、利用者数の増減に大きく影響してしまう。